

二つの運命の歯車に任せて

—文化財学科の九年—

中 里 壽 克

時々冗談で話してましたが、公務員と先生にはならないつもりでした。しかし運命とは皮肉なもので結局その両方になってしまったのですから人生はわかりません。

就職するのがイヤで六年間いた大学から抛り出された時は巨大母船から小さいボートに乗って漂流する様な心境でした。考えてみれば今のフリーターと同じ事です。それから二・三年小さな汚い下宿で食うや食わずの生活をしておりました。文化財修理の仕事を少しやりました。第一の運命の歯車が動いたのは昭和三十八年の暮でした。教授から中尊寺金色堂の仕事があるがどうかとの話でした。その仕事がどれほど重要かはほとんど認識がなく友達に相談しても終わったらやめればいいよという無責任な答えでしたが、決心してそれではお願いしますと金色堂と対峙したわけです。この職は研究所の職員という肩書きだったわけで、いつの間にか公務員になっていたのです。金色堂の修理が終了しても、その職に留まって結局三十年も居座ってしまったわけですから、私にとって文化財の仕事はいわば天職の様なものでした。

運命の第二の歯車は平成九年に巡って来ました。この年私は退官を迎える年でした。同僚からある大学で人を探しているが行く気はないかというものでした。後から考えると他にいい話も舞込んだのですが、鶴見大学との縁はこうして出来上がったわけです。当時鶴見大学というのはまったく知らなかったの、不安でしたが最初に来た話に乗ったわけです。

平成十年四月、文化財学科が発足すると、この時一緒に赴任された関先生と大学での第一歩を踏み出したわけです。大学の教育とい

うのは他の大学で非常勤講師の経験しかなく、自分への負担は大きかったのですが、この仕事の使命と重要性がわかり出したのは最近です。教育も自分の天職であったかどうかはまだよくわかりません。

永かった研究所での文化財を扱う仕事と九年間の大学での教育という仕事とを比べるのは簡単には出来ませんが、二つの仕事は私の心の内ではほとんど同一のもので矛盾はありません。研究の仕事があったからこそ、教育の仕事が充実したのであろうと考えています。

国宝などを扱う文化財の仕事は緊張の連続でよく考えると恐いものですが、教育の仕事は人間と人間の関係ですから、ここにも大きな責任と全人格的な経験が必要になります。自分から発せられる貧しい内容の言葉が若い人達にどれほどの影響を与えるかを考えるとやはり心臓が縮み上がります。

ほとんど教育の経験のない自分が教育の現場で人間対人間の関係を続けてこられたのは、その前にやって来た永い文化財の仕事が必要としたのだと考えていますし、又研究所での仕事をやってこなかったら教壇に立つ資格も能力もなかったらと思います。

大学を出た直後のフリーターのつらい経験も、研究所での文化財研究が大学での教育の上で少しは役に立って良かったと今は考えています。

主に漆を教えた私のゼミからは数十名の卒業生が出ました。この内から文化財の仕事に従事している人や、将来の仕事にしようと努力している人も居ります。彼らの将来を思うと実に大きな責任を感じざるを得ません。

博物館法改正のこと

岩橋春樹

現在、博物館法改正に向けての検討が文部科学省でおこなわれている。このことは、新聞等で報道されているので、承知している人もいると思う。また、昨年の博物館学の授業でも若干触れておいた。

議論の要点は、博物館の設置者の問題、博物館登録制度の問題、学芸員制度の問題などのものである。例えば、国立博物館が現行法では博物館と位置付けられていない。また、博物館と公式に認定されるのは登録博物館のみであるが、全国の博物館の八割以上が登録外の相当施設、類似施設という現実がある。そして、学芸員資格者が毎年大量生産されているのは御存じの通り。昭和26年に博物館法制定後、55年を経た現在、実態に合わない場面が続出しているわけで、制度の見直しは必要であろう。

いくつかの課題のなかで、文化財学科の学生諸君にもっとも関係するのは学芸員制度である。かなり重大な変更がなされるのは確実のようであるため、いままじし詳述して、参考に供することとしたい。

学芸員制度の見直しとしては、資格要件の高度化が目標とされ、学芸員資格で証明すべき専門性という言い方で、現場における実践的な能力や高度な研究能力をもとめている。具体的には、学芸員資格にランク付けをする方向のようである。基本的には、大学院修士課程以上修了を学芸員資格取得の原則要件とし、学部卒業者は準学芸員という、事実上の格下げをするまた一方、博物館実務経験、実績を有している者に対しては、上級・専門学芸員の資格を与える。このような案である。

というわけで、なかなか厳しい状況が到来しそうである。博物館法の基礎、親法となる教育基本法が既に改正を終えた流れからすれば、近々、博物館法の改正案は出てくるに相違なく、とすれば在学生にも直接ふりかかってくる問題である。そのほか、私が気になるのは、旧来の学芸員資格者の扱いで、自分の資格はどうなるのかしらということ。実務経

験27年だぞ、と開き直りたくなってくる。

とはいえ、私見を率直に述べるなら、学芸員制度の見直しは、やむを得ない措置というほかない。修士課程修了レベルでなければ、学芸員などつとまらない。現今の学部卒業者は、あまりに力不足、知識不足だからである。耳タコではありましようが、またまた申すならば、現在の大学は、我々老壮世代の高校水準といって過言ではないのである。神奈川県立歴史博物館はじめ、現行の制度下でも修士課程修了を学芸員採用条件に加える博物館が増えている。つまるところ、これは博物館現場の切実率直な声と考えていただきたい。

どうあっても博物館学芸員を目指したい者は、やはり大学院にはぜひとも進むべきである。そして、自分なりの専門分野をしっかりと固めること。指定管理者制度の導入という業界情勢もあるので、学芸員の正規採用、終身雇用という従来のような体制は望みにくく、気障な言い方ながら、フリーの学芸員として館を渡り歩くくらいの腹が必要。そのくらいの気合いがあれば、必ず道は開けるはずである。

文部科学省の最終結論は未だ先のことであり、議論は二転三転するかもしれないので、中間報告的に申し述べておきました。ちなみに、文部科学省内の検討会では、問題点整理もほぼ終えたと聞いています。



文化財学会 春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉

講演「装束と甲冑一着方と体験一」

報告 2年 高橋ちあき
山崎 朋子

平成18年度文化財学会春季講演は、6月3日土曜日に行われました。今回の講演では「装束と甲冑一着方と体験一」と題し、東京成徳大学助教授でいらっしゃる青柳隆志先生をお招きしご講演いただきました。

着方と体験ということで、実際に学生をモデルにし、装束と甲冑を舞台上で説明を交えながら着付けていただきました。着付けは2人1組で行います。前衣紋者と後衣紋者がおり、後衣紋者の指示に前衣紋者が従う形になります。

まずはじめに、束帯を着付けていただきました。束帯とは奈良時代からの朝服（朝廷仕出しの時に着用する服）のことを指します。嵯峨天皇の弘仁時代は唐様式一色でしたが、その後、次第に日本化して服装が大きめのゆったりした服を小さく着こなすのが主流になります。束帯装束の構成は、袍（ほう）・半臂（はんび）・下襲（したさがね）・裊（あこめ）・下袴〔大口ともいう〕・表袴・襪（しとうず）などからなり、それに石帯（せきたい）をつけ、帯剣の者は剣を帯び、平緒を垂げ、頭に冠を被り、足に靴を履きます。



次に十二単を着付けていただきました。十二単とは、小袖（こそで）の上に袴（はかま）をつけ、単（ひとえ）・袷（うちぎ）を重ね、その上に打衣（うちぎぬ）・表衣（おもてぎぬ）・裳（も）・唐衣（からぎぬ）を着ます。十二単の十

二とは、数が多いという意味合いで使われました。この十二単は11～12枚程あり、全て着ると約15キロにもなります。当時の女性はあまり立ち上がらなかった為、立つように出来ていませんでした。

最後に甲冑を着付けていただきました。防具の一つで、戦闘の際、身体を保護するものをいいます。時代によ



って違いますが、甲は鎧（よろい）、冑は兜（かぶと）のことをさします。「よろい」は、身体のうち胴体に着用する防具の総称で、「かぶと」は頭部の防具です。鉄・金銅・皮革などでつくられています。甲冑は臙当（すねあて）・佩楯（はいだて）・籠手（こて）・胴丸（どうまる）・面頬（めんぼう）を着ます。最後に大小二振の打刀を腰に差しました。着付けの終わりには火縄銃を持ちました。臙当は膝からくるぶしまでを護る小具足で、籠手とともに上古から用いられています。馬上での戦闘が盛んになると、下脚部の防護のため必要不可欠のものとなりました。立拳（たてあげ）は柔軟に動くようになっていました。

実際に学生をモデルにし、普段は滅多に見ることが出来ない束帯・十二単・甲冑の着付けを見ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。やはりただ展示されているものを見るよりも、それぞれの名称や使用目的などを細かく説明していただきながら、実際に着る過程を目にしたほうが興味と実感が沸きました。



〈秋季シンポジウム〉 「漆と文化財」

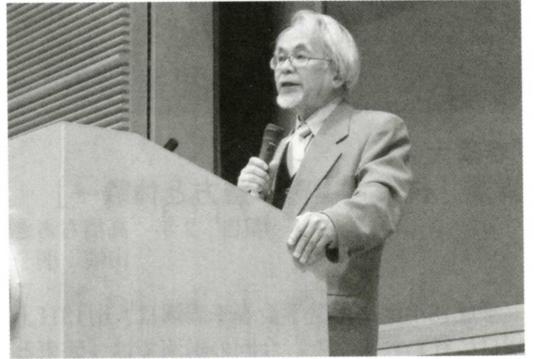
報告 2年 牧 洋平
三島 孝博

平成18年度文化財学会秋季シンポジウムは「漆と文化財」と題され11月18日土曜日に開催されました。

基調講演として、はじめに本学教授である中里壽克先生より「中尊寺金色堂修理の今日的意義」という論題で発表していただきました。最初に漆芸品の修理についての概要、金色堂の修理歴を説明され、その後、中里先生が実際に修理に携わった時の現場のスライドを用いて、修理の過程や技法について紹介していただきました。また、現場での様子や苦労したことなどをお話されました。

関連報告として、本学教授である石田千尋先生に「近世輸出漆器研究序説—文献史料からのアプローチ—」という論題で発表していただきました。石田先生は、先ず日蘭貿易がどのようなものであったのかということについてお話されました。その中でも漆芸品に注目し、『日本商館文書』など諸種の文献に表れる漆器輸出の記事、さらには帳簿に記載されている漆芸品の記録を紹介していただき、今後検討されるべき問題を指摘されました。

次に、本学教授の河野眞知郎先生から「中世鎌倉の漆—遺跡・遺物からさぐる—」という題で発表していただきました。鎌倉の遺跡・遺物に焦点を当て、漆の使用状況につ



て考察し、中でも絵付けの図柄・漆芸品を作成するために用いられたと思われる遺物から、職人と工房の存在を示唆されました。また、漆を接着剤として使用された遺物などから、民間にも広く普及していたことを指摘されました。

続いて、本学教授の岩橋春樹先生が「鎌倉出土の漆絵椀・皿—絵付けの美術史的意義を再考する—」と題して発表されました。最初に、先生の持つ、作品や様式に対する従来の解釈を示され、絵画資料としての意義を挙げられました。その中で、絵画作品が成立する過程について図を用いて説明されました。また、拙い絵ほど基礎資料としての価値が高いということについて述べられ、出土品の漆器についての考察が行われました。

最後に、本学大学院博士前期課程1年の森山知加さんから「印判施文技法の実証的研究」と題して発表がありました。はじめに印判施文技法について、筆を用いた方法と、印判を用いた方法の2通りについて考察され、それを踏まえて和紙と皮の漆との相性や文様表面について写真を交えながらお話されました。

シンポジウムの締めくくりとして、パネルディスカッションが行われました。本学教授の関先生を司会に、講演者の方々を交え、会場からの質問に答えていただきました。予定が押していたため、十分なディスカッションを行うことが出来ませんでした。関先生の進行で聴講者から講演者への質疑が行われ、秋季シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。



学会 左見右見

1年間を振り返って

1年 重黒木 愛

4月に入学し、早くも1年が過ぎ去ろうとしています。初めは、新しい生活に慣れようと必死になっていたことを今でも鮮明に思い出せます。高校と違い大学は敷地が広いせいか、教室が分からず焦ったことが何度もありました。しかし、次第に慣れていき、迷うことなく行けるようになりました。空き時間には図書館へ行き好きな本を読んだり、予習をしたりしています。食堂では友達と楽しくお喋りし、毎日をととても有意義に過ごしています。

授業で一番記憶に残っているのは、実習IA・IBです。実習IAの方は、予想もしていなかったほどレポートが出て、最初の頃はとても苦戦しました。高校生の時にはレポートを書いたことがなく、本を読み、調べてもどう書けば良いのかが分からず、正直嫌だなどと思っていました。しかし、段々と自分なりのやり方を発見し、今も試行錯誤を繰り返していますが、レポートに対し苦痛を感じなくなりました。また、様々な場所を巡検し、多くの物を見て調べるという作業を進めるにつれ、自分がいかに表面的にしか物を見ていなかったかということを感じました。また、自ら文化財を見に遠出をしたことが今までになかったので、貴重な体験が出来て良かったと思っています。

実習IBの方では土器の接着から始まり、実測図や撮影を行うなど初めてのことばかりで、作業の遅れを空き時間に取り戻しながら進めていきました。接着も実測図も細かな作業ばかりで、頭や目が痛くなるときもありましたが、やり遂げたときの充実感に勝るものは無いと思うほど、完成した時は嬉しかったです。

来年は、教わってきたことを活かせるように、努力を怠らず頑張りたいと思います。



学会委員としての1年間

1年 高橋 奈美

文化財学科に入学してから、今までにない様々な経験をすることができました。その中でも貴重な体験となったのが学会委員です。

初めての学会である春の講演会で、私はどう動いたらいいのかわからず指示を待つのみで、自ら何も動く事ができませんでした。自ら聞いて動く事さえも満足にできずに、仕事を手際よくこなす先輩方を見てみると、先輩たちに憧れを抱く反面、何もできない自分がとても嫌でした。秋のシンポジウムでは、春の講演会より役に立てるよう、ひそかに他の1年の学会委員と春の講演会の反省をし、シンポジウムに臨みました。ですが前回より進歩したとはいえ、やはり自分自身の中で反省点は沢山挙げられました。

私は今年、春秋と二つの学会を経験した後、このまま自分は学会委員を続けていくことができるのかと不安になり、先輩に「どうしたら委員の仕事をやれるか、先輩方の役に立てるのか」など聞いた事があります。先輩は「話を聞くだけでなく、先輩が何か仕事をするときは何もできなくてもいいから、まずはくっついていき、見て仕事を覚えなさい。仕事が終わらない人に仕事は与えられないからね」とアドバイスして下さいました。

ただ先輩方にくっついていける事は簡単です。しかし、そこから自分が一つでも多く学べるように頑張りたいと、先輩のアドバイスを聞いて思いました。この1年間で学んだことを生かし、アドバイスをしてくださった先輩方に近づけるように努力していきたいです。

ホップ・ステップ・ジャンプ

1年 山田 康太

木々の立ち並ぶ参道を多くの期待と不安を抱きながら歩いた入学式から、1年が過ぎようとしている。振り返ってみると、この1年間は私にとって新しい生活に慣れるための年であった。

ほんのひと月前まで高校生であった私は、大学生活という広くて新鮮な世界に立ったとき、その勝手の違いに戸惑ってしまった。自分自身で履修科目を決める、始まる時間も終わる時間も日によってまちまち。そして、様々な授業で出される課題やレポート。もちろん、その内容も今までより難しく、「うまく大学生活に溶け込めるだろうか」私の大学生のスタートは、そんな思いで胸がいっぱいだった。

そんな中、大きな力となったのが文化財学科の友達であった。出会う人は十人十色、様々な人がいるが皆に共通していることは文化財が好きだということ。そんな友達が出来るにつれ、大学生活もだんだん楽しくなり、私は生き生きと通うようになっていった。

また、物事は繰り返すうちに体に染み込んでいくものであると実感した。初めは困難だったレポートも、数をこなすたび、次第に「人に説明する文章」を書けるようになった。文献を探するため図書館に行くうちに、通う癖もついた。

初め背負っていた多くの不安も、こうした生活の中で次第に消えていき、今では大学生活を楽しむ感じられる日々を送ることができている。大変ではあったものの充実した濃い1年であった。来年度からは授業も、より難しくなり忙しくなるだろう。この1年間の経験という「ホップ」を元に、「ステップ」さらに「ジャンプ」できるような大学生活を送っていきたい。



2年という一年間

2年 渡部 翔太

私にとってこの2年生という時間は非常に早く、まさに「光陰矢のごとし」であった。この1年間、私は新入生歓迎オリエンテーション準備実行委員会、鶴見大学・鶴見大学短期大学部課外活動公認団体連合会、紫雲祭実行委員会、ユースホステルクラブといった課外活動に力を入れてきた。そういった課外活動を通して学んだ事は非常に多く、私の人生の中でも充実した1年間であったといっても過言ではない。

また学業の面でも、夏季に行われた発掘実習、後期に行われた古文書修復実習といった文化財学科でしか出来ない授業においても、素晴らしい経験が出来たと思う。発掘実習では、炎天下の中での実習であったが、そこから得たものは計り知れない。発掘の技術、知識といったものも得られたが、

むしろ団結力の大切さ、友人の大切さといったことの方が得たものは大きかったように感じる。炎天下の中で行われる実習は、次の2年生にとっては不安や心配があるかもしれないが、それでも同じ科の仲間とやっていく内に絶対に楽しくなっていくと思うので是非楽しんでもらいたい。そういった事を経験するといつの日か自分が組織の一員になった時に必ず役に立つはずである。

4年間という長いようで短い大学生活の半分を終了したが、それでも私は悔いを残していない。残りの大学生活は1年・2年の時よりも更に充実させて、将来の自分の宝物になるような2年間にしていきたい。

中里ゼミを終えて

3年 渡辺 知佳

中里ゼミでは実際に漆芸品を製作することを通して、文化財の研究を行っています。

ゼミに入って最初に行うのは縄文時代の櫛の制作です。最初の作業は小麦粉と水と漆を混ぜ、接着剤の役割をする麦漆を作ることで、ほとんどの人がここで初めて漆に触れることとなります。先生に見本を見せてもらいながら進めるのですが、初めはへらを使うのも難しく思うようにできませんでした。また、見た目や感触で覚えていくしかないなので、前回習ったことを次もまったく同じに行うことができず苦労しました。

次に行うのが手板の製作です。製作工程見本と、蒔絵用、螺鈿用の三枚を製作します。手板の製作は塗って乾かすことの繰り返しで、根気のいる作業です。しかし、今まで何気なく見ていた漆塗りが、こんなに手間のかかるものなのかと身をもって知ることができ、大きな収穫となりました。ごく普通の板から私たちが目にするような漆塗りへと、自分の手で作り上げていくことの満足感はとても大きなものでした。

自由さの中里ゼミの魅力の一つです。作業を行う保存処理室はゼミの時間以外にも自由に使用することができ、授業中に終わらなかった作業や自主的に進めたい作業などを、自分のペースで進められます。また、デザインも自由なので、同じ課題でも自然とそれぞれ個性ができてきます。ゼミ生同士で作品を見せ合うのも楽しみの一つです。

中里先生は今年度で定年を迎えられるため、私たちが教えて頂いたのは半年と短い期間でした。しかし、短い期間の中で教えていただいたことをできる限り吸収できるよう努力できたと思います。この半年で学んだことを来年度のゼミに生かしていきたいです。



青春の学生生活

4年 高橋 苑子

興味ある文化財の世界を、実習や専門性を高めることができるカリキュラムで学べる鶴見大学に入学して早4年、もうすぐ卒業を迎えます。この学科の学生として多くの友達・先輩・後輩、そして先生方と過ごした時間は、本当にあっという間でした。その中で興味あることに夢中になれたことは、とても幸せなことだと思います。

1年次は勉強と課題に追われ、自分の中の大学生像とかけ離れた忙しい毎日を送っていましたが、2年次から徐々に自分のやりたいことを考えるようになりました。3、4年次のゼミでは、多くの美術作品に触れ、自分の中で分析意見を言うことを学びました。目的意識を高く持ち、自分のやりたいことに妥協せず追究することができ、学生の性分とはまさにこれであると思いました。

また、私の大学生生活は学会と共にあったとも言えます。4年間学会委員として学会に携わっていたことで、対外的な活動から社会を学び、幅広い人脈を作ることができました。学会での活動を通して、より充実した生活が送れたと思います。皆さんも、進んで参加してどんどんチャンスを掴んで下さい。そして、自分たちが所属している学会を、自分たちで大きくして開けた学会にしていって下さい。

最後になりましたが、4年間は心に残ることがたくさんあり、語り尽くせません。いつも熱心にご指導くださった先生方、助手のみなさん、いつも的確なアドバイスをくださった先輩方、いつも支えてくれた後輩のみんな、辛い時も楽しい時も共に過ごした友人たち、そして遠方から通う私を温かくサポートしてくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

一年を振り返って

修士1年 森山 知加

今年度は私にとって、「初めて」の多い年となりました。まず、初めて学会委員の仕事に携わりました。それまで、学会というのは春と秋に行なわれる講演会やシンポジウムの際に触れる程度でしたが、これを機に学会にも様々な仕事があることを知りました。さらに、今年の秋季シンポジウムで自分の研究テーマについて、初めて発表する機会を与えていただきました。これについては、本学科の先生方、並びに学会委員の皆様深くお礼を申し上げたいと思います。

学会では度々、学会を盛り上げるためにはどうすれば良いかということ話し合います。この一年で私は、文化財学会というものを学会委員として、一般の参加者として、講演者として、それぞれの立場から見る事が出来ました。文化財学会はまだ発展途上の段階にあります。今回、私がそれぞれの立場から見て、気付いた反省点や改善点などをこれからの学会に活かしていけたらと思います。

しかし、盛り上げるためには学会委員の努力はもちろんですが、それ以上に学会の会員である文化財学科の学生の皆さんの協力も不可欠です。もっとこうした方が良いという意見や、何かイベントの企画・立案の意見があれば、是非聞かせて下さい。そのような活発な意見交換の結果、文化財学会が盛り上がっていくのではないかと思います。また、文化財学会は文化財学という学問に、触れることの出来る数少ない貴重な場です。学会の活性化は文化財学のさらなる発展にも繋がるのではないのでしょうか。反省ばかりの多い年となりましたが、来年度は学会が今以上に向上出来るよう、努めたいと思います。



— 大三輪先生を偲んで —



思い出

3年 細島 志浦

大三輪先生がお亡くなりになって、もう半年が過ぎようとしています。しかし、先生と一緒にお話した日が昨日のこのように私の心の中で止まっています。長い廊下を通る時、合同研究室から楽しい笑い声が聞こえるたびに、もしかしたら先生がいるかもしれないと思っています。

合同研究室では、先生と日本の神話や吾妻鏡の歴史などたくさんのお話をしました。時には、漢字テストもして下さいました。丁度合同研究室にいた3年生数人へ先生が問題を出されテストを行ったところ、平均点が4点という悲惨な結果に終わりました。一人ひとり採点していただいたのですが、先生は何も言わずに笑顔で答案を返却されました。この事に私たちはプレッシャーを感じ、もっと勉強しなくてはと思いました。

このような勉強面の他にも、先生の高校時代のことや、鎌倉の方言、愛犬の最近の様子、南の島の旅行の話やある島の砂浜に潜む寄生虫とその対策法、本当にあった怖い話、結界の張り方、ハチミツと八幡宮の関係…など、挙げたらきりがありません。どれもおもしろく、いつも笑い転げていました。そして、先生は私のくだらない質問にも冗談を交えながらお答えくださいました。先生からはたくさんのお話を学び、本当にお会いできてよかったです。

時間はどんどん流れていきます。しかし、先生と過ごした時間は色褪せはしません。もう来年は卒業ですが、私が何歳になっても、先生は私達の先生です。たった2年と半年でしたが、私にとってはとても充実した年月でした。もし、先生が私を見る時があったのなら、「成長したな」と思われるように、精神面・勉強面共に励んでいきたいと思っています。

大三輪先生追悼文

4年 石塚 菜津美

私大三輪先生と出会ったのは、大学入試の時でした。

当時、怪我をして松葉杖について面接に現れた私に、少し驚きながらも、優しく接していただいた事をよく覚えています。

無事入学し、初めての実習で日光に行った際、大三輪先生とお話しした時に「君、ナルトクでしょ?」といきなり言われて、最初は分からなかったのですが、どうやら私の出身高校名「東京成徳」の事を言われて、松葉杖が印象的だったらしく、面接で会った事を覚えてくれていたのです。そんな大三輪先生の人柄に触れて、3年のゼミ決めて大三輪ゼミに入る事を決めました。

大三輪ゼミは、マイペースな人達が多く、まとめるのは大変だったと思います。ゼミの時間は、先生との交流の場になって行き、さまざまな話をし、卒論に適切なアドバイスをたくさんいただきました。先生が話す京都話は面白かったです。

先生の訃報を聞いたのは、ゼミの日でした。先生の最後の姿を見たのは、前の週のゼミの時間でした。あまりに突然過ぎて今でも信じたくない気持ちでいっぱいです。

卒論が終わり、ゼミ生で先生のお墓参りに行き、無事卒論を終えた事を報告しました。欲を言えば最後まで、大三輪先生に見届けて欲しかったです。

短い間でしたが、大三輪ゼミとして先生と学ぶ事が出来た事は、自分にとってとても大きな財産になったと思います。ありがとうございました。

大三輪先生との思い出ぼろぼろ

4年 熊谷 絵里

大三輪先生のご逝去は、大三輪ゼミ生として大変ショックを受けました。先生に色々ご迷惑をおかけしたまま、お別れをする形となってしまったことが大変残念でなりません。

先生との思い出で印象深く残っているのは、大学3年生の夏の頃、インターンシップ体験の志願書の手直しをお願いに伺った際のことです。私は文章を構成することが苦手なので、先生と一緒に考えていただきました。たった200字程度の文章をまとめるのに2時間もかかってしまい、貴重なお時間を割いていただいたことを今でも感謝しています。まだゼミの開始前だというのに、本当にお世話になってしまいました。口語体を文語体に訂正していただき、文章の上手な書き方まで教えていただいたことは忘れられません。また、この時に色々なお話ができ、卒業論文はどのようなテーマについてやるのか、こういう事を調べてみるのも面白いぞ、など様々なことを教えていただいたあの時間は、昨日のように思い出されます。とても緊張して合同研究室に入ったはずが、終始リラックスできたのは先生のお心遣いがあったのだと今では感じています。先生とお話したことを思い出すと今でも心が温まります。

また、毎週のゼミの時間も先生との思い出です。知識が乏しいために色々なことを質問し、授業の進行を遅らせてしまったこと、卒業論文のテーマのアドバイスを何度もしていただいたことなど、数え切れないくらいです。

先生がご逝去されてから半年以上が過ぎましたが、今でも信じられない思いです。お墓参りに行った際、先生とお別れしてからあった出来事を報告しているときに、感極まって涙がぼろぼろと流れたのは、今までのご恩をお返しが出来なかったからだと思います。ですが、次に先生のお墓参り行くときは絶対に泣きません。先生はいつまでも私たちの泣き顔を見るよりも、きっと元気な姿を見たいと思われているでしょう。

「千の風になって」という歌にあるように、先生はお墓の中からではなく、風になっていつも私たちを見守ってくれていると信じています。これからも、先生が見ていてくれるから、と前向きに毎日を過ごしていきたいです。

拝啓、大三輪先生

4年 竹内 千冬

2006年6月27日火曜日、先生のお亡くなりになった日からもう半年以上の年月が流れてしまいました。初夏の時期から一転、もう季節は冬から春へと移り変わろうとしています。就職活動や、卒業論文などで必死に駆け抜けてきた4年生には、あっという間に過ぎてしまったように感じられます。けれど、どんな忙しさも先生がいなくなってしまった喪失感を埋めてはくれません。

卒業論文の題目が決められなかったゼミ生に「自分の好きなことじゃないと続かないよ」と優しく諭され、さあこれからという時に忽然といなくなってしまった先生。「大三輪ゼミは放任主義だから、自分から行動を起さないと駄目だよ」とゼミに入る際に、何度も先輩や他の先生方から笑いながら助言された事を、別の意味で痛感しています。

もっと、聞きたい事や知りたい事があったのに何故、先生に伝えなかったのか。もう、電気が点く事が無い部屋の前で、度々後悔しています。できるならば、お墓に供えるのではなく、先生ご自身に卒業論文を見て頂きたかった。何時もの笑顔で、辛口に評価をつけて頂きたかったです。

今年の3月、私たち4年生は鶴見大学を卒業します。それぞれが選んだ道には色々な困難や苦勞も待っていると思いますが、心を新たにするのはなく、大学で学んだ知識や、成長した自分を踏まえ、社会に貢献できる人物へとなっていきたいと思っています。それぞれが頑張っている姿を、どうか見守っててください。

偲ぶ気持ちと感謝を込めて 敬愛なる先生へ



研究部会報告

研究部会連合

研究部会連合の活動は、研究部会の発展や部会同士の連携を深めるため、そして皆さんにもっと部会活動について知ってもらうために、各研究部会の代表が月1回程度、会合を開いて話し合いを行っています。また昨年度に引き続き、連合誌『財の穴』を発行しました。これは研究部会がどういった活動をしているのかを知ってもらうために、活動内容を簡単にまとめた広報誌です。

今年度は、研究部会連合の活動を広めるために連合会の合同企画を開催しました。第1回目今回は、目黒の能楽堂へ能の鑑賞に行きました。また、それに伴い事前勉強会を開き、関先生に能についてのお話をさせていただきました。

残念ながら現在、各研究部会ともに部会員数が伸び悩み、今後の維持が難しい状況になっています。学部生の皆さんの協力がなければ、これから先、部会活動を続けていくことができなくなってしまいます。特に、1・2年生の部員数が少ないので課題になっています。研究部会には1度参加したら必ず入会しなければいけないという義務はありません。各部会とも巡検などの活動を行う際には随時6号館のホワイトボードに告知していきますので、興味ある活動がありましたらお気軽にご参加ください。

今後の予定は、『財の穴』第4号の発行、これまでの活動報告を載せた自由閲覧用のファイルの設置、好評だった研究部会全体の合同企画を考えています。各部会が来年度に向けて、皆さんが興味を持てるような活動ができるよう準備中ですので、是非ご期待ください。

江戸東京研究部会

私たち江戸東京研究部会（通称、江戸研）は「歩くと歴史がみえてくる」をモットーに活動しています。近世では「江戸」であった東京を歩き、現在の視点から江戸の町を垣間見ること、机上の空論ではない「生きた知識」を体で感じることを目的とした活動をおこなっています。私たち江戸研では毎回巡検を行う前に例会を催し、巡検場所の確認を行い、レジュメを作った上で巡検に臨みます。このように書くと「堅苦しいな」というイメージが付きがちですが、実際に行っていることのテーマを例にあげると「四谷怪談」「吉原の遊郭」「文楽鑑賞」など文化財学科の学生ならば一度は興味を持てるテーマを扱っています。また、実際に東京を3~4時間かけて歩いているので、運動不足の解消や東京の街に詳しくなるなどのメリッ

トもたくさんあります。ただ楽しいだけでなく「研究」をおこなっているの、今まで知らなかった知識を多分に取り込むことができ、文化財勉強の「お助け」的な部会になっていると思います。

さて、昨年度の活動報告ですが、昨年は6月に部会連合企画として目黒の喜多能楽堂にて喜多流シテ方中村邦生先生の舞台「隅田川」を鑑賞しました。そして能と一緒に行われた狂言を鑑賞し、日本の古典芸能に触れ日本人の美意識や価値観を垣間見ることができました。また、11月には江戸東京研究部会の創立者でもある富川武史さんが企画展示をされた「大井」（品川歴史博物館）の展示解説や品川の街の巡検を行いました。そして、12月には「渋谷・原宿・青山を巡る」と題して、若者に人気の地の歴史に焦点を当てた巡検を行いました。

今後、江戸東京研究部会では「研究」の要素だけでなく私たちの世代に近いテーマで「興味・関心」が持てる巡検を行いたいと考えています。少しでも関心がありましたら気軽に例会にご参加下さい。

鎌倉研究部会

「鎌倉研究部会」は、2006年度、部会のテーマでもある「鎌倉」に関連する地を中心に、巡検を主とした活動を展開してきました。美術・考古など分野に捉われることなく、毎回様々な視点から巡検を行いました。

今年度最初の活動は、5月21日に行われた1年生の実習、北鎌倉の巡検への同行でした。円覚寺・建長寺・鶴岡八幡宮、そして源頼朝の墓というコースを1年生と共に巡り、部会の紹介にもなったと思います。9月には5・6・7日と2泊3日、美術工芸研究部会、歴史考古学研究部会との合同企画として、岩手県にいきました。1日目には奥州藤原氏の拠点として栄えた平泉町に行き、金色堂で有名な中尊寺、藤原氏二代の基衡が建立したといわれる毛越寺などを見て回りました。2日目には平泉町からさらに北上して、北上市まで足を伸ばしました。最初に、国史跡の江釣子古墳群・北上市立博物館・極楽寺跡・奥州市埋蔵文化財センターを見学してきました。また、11月3日には、円覚寺・建長寺の風入れ（収蔵している文化財を虫干しすること）を見学に行きました。普段では見られない重要文化財を数多く見学でき、大変有意義な巡検となりました。

以上が2006年度の活動報告となります。2007年度の活動予定はまだ詳しく決まっていますが、巡検に加え勉強会などの活動も行っていきたいと考えています。また、本年度、新入部員獲得のためにも、より一層魅力ある部会にしていきたいと思います。

古典芸能研究部会

古典芸能研究部会では、装束や古典芸能に触れて、日本の文化を知ろうという目標のもとに活動しています。では、今年度の活動内容について紹介していきたいと思います。

まず、夏季・冬季に行った「装束の会」です。7月15日に行った会では、講師として青柳隆志先生をお招きし、「直垂を着る」「ゆかたの着付けをしてみよう!」と前半・後半に分けて活動しました。前半では服のつくりを見たり、直垂を実際に着て、烏帽子をかぶり、自由に歩き回って活動のしやすさを確かめたりしました。後半では、「ゆかたを一人で着られるようになりたい!」ということもあり、着付けはもちろん、帯の結び方、着物のたたみ方まで習いました。

冬季では、「着物を着て、鎌倉に行こう!」を企画し、1月13日に行いました。着付けに詳しい古典芸能研究部会のメンバーや、能楽研究部会の方に手伝ってもらって、学生同士で教えあいました。「鎌倉に行こう!」はオプションとしてですが、着物を着て、新鮮な気持ちで鎌倉を歩いてみました。

今年度は活動が少なく残念でしたが、来年度は今年に引き続き「装束の会」を夏季・冬季に行いたいと思います。その他に、「江戸時代の女髷を結う」といった企画も考えています。

少しでも興味があったら、ぜひのぞいてみてください。

美術工芸研究部会（鶴鳴会）

こんにちは!美術工芸研究部会こと「鶴鳴会」です。

鶴鳴会は「美術工芸」の研究をしている部会で、分野・時代に捕らわれることなく、美術工芸品を様々な角度から研究し、さらには自分自身で作品を作ってしまうという部会です。

活動の趣旨についてですが、1つ目は、自分の専門分野に捕らわれず、幅広い時代の絵画・彫刻・工芸品などを対象としている。2つ目は、美術工芸品の技術的・芸術的価値を見出す鑑識眼を養う。3つ目は、本や図録に頼らず、実物を見る事で作品の本質に迫るといことです。

2006年7月の巡検では、葛飾区青戸にある江戸切子の工房を訪れ江戸切子の製作体験をしました。工房の職人さんから指導を受けながら初めて切子にチャレンジして、出来上がった自分だけの切子を手にしたときはとても感激しました。

2007年度の活動予定としては、半期ごとに2、3回のペースで、美術品の取り扱い講習会、美術館・博物館巡り、工芸体験、寺社や街の写真撮影会、他部会と合同での巡検などを予定しています。特に、今回好評だった江戸切子は、毎年恒例の行

事にしたいと考えています。

文化財学科に入学した皆さんの中には、少なからず学芸員志望の方がいると思います。授業でも一通り学芸員に必要な知識、技術の講義、実習は行われますが、どうしても1年、2年と時間が経つと忘れてしまうものです。そのようなところを補ったり、改めて学んだりすることが部会活動の中でできるのです。もちろん、自分の興味のあることを学ぶこともできます。理由はなんでも良いのです。

難しく考えることなく、とにかく少しでも興味があれば、私たちの部会に限らず、気軽に参加してみてください。以上、美術工芸研究部会でした。

歴史考古学研究部会

「歴史考古学研究部会」は例年鎌倉を活動の拠点としてきました。しかし、前年度からは鎌倉に固執することなく、様々な場所へと赴きフィールドワークを実施しました。元々当部会の基礎理念は「関東全域に目を向けたフィールドワーク」であり、今年度はそれが実行できた年ではないかと思えます。

第1回目の巡検は「鎌倉やぐらツアー」と題して鎌倉のやぐらを巡り歩きました。毎年恒例となっているこのツアーは、入学をしたばかりの1年生や鎌倉のやぐらへ行ったことが無い方にとっては、鎌倉の歴史に触れられる絶好の機会です。先輩達と楽しく歴史や好きな寺社の話しをしながら、和気藹々と鎌倉の歴史を学べます。今後も行いますので、ぜひ興味がある方は参加していただけたらと思います。

夏には鎌倉研究部会・美術工芸研究部会と合同で「夏の納涼企画」と題して、奥州平泉へ歴史散策に行きました。上記の部会さんからも既に報告があると思いますが、「それぞれの部会が得意とする分野を平泉に見に行こう」ということで、中尊寺金色堂や奥州市埋蔵文化財センター等を2泊3日で訪れました。このように、いくつかの部会が合同で旅行を企画したことは数少なく、今後もこのような活動が行っていったらと考えています。

また、11月は静岡へ赴き様々な場所の見学・勉強をしてきました。更に同じ月、古典芸能研究部会・美術工芸研究部会の方々にも声をかけ、鎌倉へ巡検に行きました。こちらは特にテーマは設けなかったのですが、皆で楽しく話をしながらゆっくり歴史散策をし、帰りには小町通りで買い物も楽しみました。

今年度は実現出来ませんでしたが、行く場所への事前のレジュメ作り・反省会・報告書作りなどを今後行っていけたらと考えています。「ただ楽しかった」では終わらず、その後も勉強や知識を身につけていける場として、今後も活動を行いたいと考えています。

- 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
 6. 本会に次の役員を置く
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
 7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
 8. 本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。
- 付 平成11年10月16日から発足する。
付2 平成16年4月1日 一部改正

平成19年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季大会

日 時 6月2日（土）
 総 会 午後1時から
 講演会 午後3時から（予定）
 会 場 鶴見大学会館メインホール
 講 演 「正倉院の世界
 —正倉院文書と文化財—」（仮）
 講演者 杉本一樹氏

文化財学会秋季シンポジウム

日 時 11月17日（土）午後1時から（予定）
 会 場 鶴見大学会館メインホール
 テーマ 「城郭をめぐる」（仮）

鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 研究部会活動

編集後記

入学してから、あっという間に1年が過ぎました。私は、文化財学会の一員として春季・秋季の学会に参加して、先輩方の行動力に圧倒されっぱなしでした。人に言われる前に自分から動く姿をみて、自分もこうならなければいけないと自覚しました。学会はやりがいもあるし、自分の成長にもつながる仕事だと思います。先輩方に迷惑をかけてしまっていますが、今後も学会の戦力になれるように頑張っていきたいです。

文化財学会報は、春季・秋季学会の話や各学年の実習の感想、研究部会報告などが掲載されています。来年の実習は何をやるか不安な方や、研究部会が何をしているのか興味のある方、そうでなくとも皆さんの参考になる事が書かれているので是非読んでみてください。来年は、今年の反省点を克服し、学んだことを次の1年生に伝えていきたいと思っています。（編集委員）